第 14 回　日中戦争史研究会
2013 年 5 月 18 日（土）13:00～　愛知大学於

参加者（五十音順，敬称略）
有田義弘（愛知大学），岩田幸雄（愛知大学大学院），岡崎清宜（名古屋大学），王敬翔（愛知大学大学院），菊池一隆（愛知学院大学），高明潔（愛知大学），呉米淑（愛知学院大学），顧令儀（愛知大学），榊原真理子（愛知県立大学），柴田哲雄（愛知学院大学），朱文瑛（愛知学院大学），高橋五郎（愛知大学），千賀新三郎（一般），張鴻鵬（名城大学大学院），張新民（大阪市立大学），屠麗苹（(医）葵鐘会），馬場毅（愛知大学），古澤文（愛知大学），増田喜代三（愛知大学大学院），水野光朗（都留文科大学），溝口歩，三好章（愛知大学），森久男（愛知大学），安井裕（一般），楊韜（名古屋大学）

報告 1：張新民（大阪市立大学）
「北支軍」の映画工作と新民映画協会

【質疑応答】（司会：馬場毅）
これまでよくわからなかった新民映画協会について大まかな評価のみならず，具体的な点について当時の資料を用いて詳細にご報告頂いた．北支軍が重要な役割を果たしているという点，日本人居留民社会には影響を与えたものの，実は対中国民衆映画宣撫工作ではあまり影響はなかったという点，そしてこの間どのような映画が上映され，映画館としてどのようなものがあったのか，大変詳しく具体的に説明して頂いた.

ひとつお断りとして，本研究会のご案内には発表タイトルに「北支軍」と括弧がついているのには理由がある.「支那」ということばを使わない方がもちろん良いということは歴史を扱っている人間には常識である．しかしながら歴史的な用語として使わざるを得ないということであり，資料にも北支などの用語が使われているが，張先生も使用しない方が良いことを自明の前提として承知されて使われていると考えます.

なぜこのようなことを述べるかというと，最近，中国の公使が豊橋の日中友好協会を通じて，愛知大学を表敬訪問したいということで来られた際，急きょ，東亜同文書院大学記念センターも参観された．訪問は短時間であった為，非常に簡単な説明しかできなかったが，その後，日中友好協会主催の歓迎昼食会の席上で，私は参加しなかったが，今回，公使が東亜同文書院を訪問したのは初めてであるといことで話題になった．訪問された際，公使の方から握手を求められたはずだったが，それはがらりと変わり，「自分は東亜同文会や東亜同文書院を全く評価していない．以前から知り合いの日中友好協会会長から紹介があったため来ただけである．センターの中には「支那」という表現が多々あり大変不愉快であった」ということを私は間接的に伺った．しかし，東亜同文書院大学記念センターの展示には，院生たちの大旅行をもとに書かれた「支那省別全誌」や当時の写真の中に「支

那」と入っているものの，キャプションでは表記していない．そのため公使のそうした発言を伝聞し，言いがかりを受けたように感じた．おそらく現在の尖閣をめぐる日中関係の中で公使たるものが，日本に媚びたような歴史観の持ち主ではないということをその場で証明したかったのではないかと推察している．それを契機に学内から東亜同文書院記念センターの表記・展示について見直しの要望がでており，内容的に検討するが基本的に変える必要はないと考えている．

わたしはそもそも「支那」ということばを，歴史的に使われた意味あいからも，使わない方がいいと考えるが，歴史用語として使わざるを得ないという点を張先生は十分踏まえられて本日の発表では使われた．三好先生のタイトルにも「支那派遣軍」とあるが，これも同様に歴史用語として使われたわけで，そういう意味があるといことを敢えて述べさせていただいた．

【質疑応答】

柴田：新民映画協会が管轄している映画館で上映した映画に，中華電影公司で制作した映画は含まれていたのか？そこで制作された映画には様々なスターが出演し，上海では人気があったというようだが．

張：日本映画館はアメリカ映画も評価している．最初は一緒に上映しても構わなかったが，特に天津の同時爆弾テロ事件以降は完全に日本映画のみとなった．上海の中華電影公司はその時期まだ設立されておらず，それより後になる．上海の映画の場合，盧溝橋事件直後はほとんど制作を停止しており，上映する映画は盧溝橋事件以前に制作された古いものだった．それらは中国映画館で上映しており，館数は華北に 50 数館ほどあった．上映するものは日本の憲兵と新民本映画協会によって，内容に抗日的な傾向があるかどうかチェックを受け，無い場合は中国の映画館で上映された．そこへ中国人は見に行ったようなので，映画を見る環境は事件以後もあまり変化はなく，日本映画を見る必要もなかった．また，日本側も広告をだすなど積極的な勧誘も行わなかったので，中国人の中でも一部，日本語を勉強する為，また上流階級の人々が見に行くぐらいで，一般民衆はほとんど中国映画をみていた．これは新民映画協会時期の北支軍映画工作の失敗であると言える．やはり積極的に日本映画を宣伝し観客を取り入れなければ文化として浸透するのは困難である．　最後の部分で引用している日本側の国策映画論者の指摘は一理あると考える．その理由として上げている日本人人口の変動についてはレジュメ P20 下部に，大阪朝日新聞北支版による北京・天津を中心としたものを示してある．

1937 年以前の古いものだが，上海映画を上映していることはしている．

柴田：馬路天使もですか？

張：馬路天使も上映しています．その後も上映しています．なぜだか良くわかりませんが，1930 年代当時の左翼映画は社会の批判が多く，日本側は蒋介石政権下の中国はダメですよというイメージで，日本占領下の華北ではよく上映された．

森：北京にある中央電影档案館で満映のフィルムがたくさん保存されているようだが，新民映画協会のフィルムは保存されていないのか？

張：新民映画協会自体のフィルムはない．なぜなら新民映画協会が作成するのは依嘱映画であり，依嘱映画を制作した場合，フィルムはその依頼先にすべてかえさなければならないため協会はフィルムをもっていない．新民映画協会の映画は同じ系列で少し保有しているが，日本軍に関する映画は基本的に新民映画協会のリストから外してあり，引用している資料の情報は，軍部で書かれた文章から得たものである．日本にも華北映画の統計があるが，日本の軍部に関する映画は 1 本もない．例えば P11 下部，奥田氏の引用部分にある「小放牛」，「青風亭」，「覇王別姫」はすべて京劇映画で，主演者は当時有名な京劇俳優荀慧生，馬富禄，馬連良，呉素秋であった．余談ですが，戦後，馬連良を漢奸（売国奴）として裁判にかけようという事件もあった．これらに関しては資料もフィルムもなく，軍関係者の書いた文章の中から 3 作品が京劇映画であるということが分かった．当時は軍部の方針として，あまりにも映画的な技法を入れると，映画を見なれていない一般の人々には理解されにくいとされた．それらの京劇映画は，その方針に基づいて，芝居をそのまま写した京劇記録映画のようだ．

　やや話が脱線したが，新民映画協会の資料は管見の限り，国家電影資料館にはないと思われる．ただしあったとしても閲覧は難しいだろう．

森：当時の上海の映画の DVD が復刻されているが華北のものないのか？

張：1 本のみで，水滸伝を題材にした「混江龍李俊」がある．それは現在，出されている状態が非常に興味深い．会社のタイトル・作成時期の分かる部分はカットし，真ん中だけ出しており，主演が誰なのかキャストの部分も全てカットしてある．なぜならば，華北電影以降も，当時の照明，カメラ，舞台装置など技術面においてはすべて日本人が担当していた為と考える．

楊：「北支ニ於ケル新聞通信及映画施設處理要綱」はどのような資料なのか？1 頁のみなのか，もっと詳しく書かれたものなのか．またどういった経緯で発見されたのか，もう少し詳しくおしえて頂きたい．

張：レジュメ P5 に載せた写真の通り手書きのもので，日本の防衛省の資料館で入手した．

後ほど調べた結果，JACAR（アジア歴史資料センター）にも同じものが所蔵されていたことを確認した．

楊：日本映画は，中国人観客の吸収については消極的な態度があった，ということだが，それは爆弾テロ事件の影響も考えられるものの，余裕が無く見に行くことができなかったという可能性も考えられるのではないだろうか？

張：そうした原因も一部ある．アメリカ映画館のように，日本映画館も中国人にプログラム構成などを任せた方が観客は入っただろう．しかし日本映画館は全て，プログラムなども前もって直接指示していた．新民映画協会は一つの組織で，次のフィルムは何が入ってくるのか，プログラムはどれを上映するのか，などを映画館に通知し，フィルムを持っていくという方法で運営していた．

余裕がなかったということもあるが，北京，天津，済南，青島などの大都会では，多少余裕はあっただろうと考える．

菊池：レジュメ P19 表 3「華北に於ける新民映画協会配給日本映画館一覧」が掲載されているが，日本との関係において，これら華北の映画館ではどういう映画が放映されたのか？というのも日本軍がそのまま済南を占領できたのはわざわざ華北が道をあけたという経緯があり，そうした日本との連携・関係において華北は疑われた．その場合，たとえば映画はどのように利用されたのか？

台湾映画も満映との関係で映画制作をしている．たとえば有名なもので「戦う高砂義勇団」などあるが，そうした満映と台湾との合作で作られたものはどの程度上映されたのか？アメリカの映画に変更されたあとはどのようなものがはいってきたのか？
日本映画館の入場料が 1 等は 1 円 20 銭，2 等が 80 銭とあるが，これは高いのではないだろうか．どういう観客が入ったのか，観客の質の問題もあると思うがどうなのか？

張：韓復渠が投資した映画館は，日本が占領した後は青島も済南も同じだが，抗日中国軍隊の将軍のために接収した．接収された済南の二つの映画館には韓復渠の資金が入っている．そこで満州事変以前はどのような映画が上映されていたかと言えば，普通の上海映画を上映している．ただし，収入源はかなりが韓復渠に入っている．

台湾の戦時中の映画は多少あるが，新民映画協会自体は劇映画を作っていない．京劇映画中心の制作となったのは 1942 年以降なので，新民映画協会自体はほとんど関連性がないと考える．
上映されたアメリカ映画はほとんど天津で上映された．天津は比較的自由で太平洋戦争以前の上海の租界と同じようであった．租界の中に映画館があり，普通に上映をしていた．日本映画館の光陸劇場と国泰劇場は租界の中にあり，日本映画の場合日本租界で上映して

いる．あちらで日本映画を上映すると問題が起こると懸念された為，それを避けて欧米映画などを満映の配給で上映した．たとえば「袁将軍的苦茶」など，中国の侮辱映画であると当時人々は文句を言った．たとえば「大地」が中国で公開されたのは盧溝橋事件直後の1938年，華北であった．当時，中国人は普通に見ているが日本の宣伝メディアは，その内容は中国を侮辱していると批判し上映禁止させた．しかし「東洋の平和な道」は「大地」のストーリーではなく技法を真似て制作，上映している．上映されたアメリカ映画は上海とあまり変わりが無かった.

料金については当時の館主も高すぎると文句を言っている．せめて満州と同額にできないかと要望を出した．しかし新民映画協会の資金は配給で得たものだけであり，宣撫映画制作には多額の資金が必要であるため料金は高く設定された．アメリカ映画よりも高く，アメリカ映画の大作はせいぜい1元にも関わらず, なぜ「東洋の平和の道」は1.5元なのか？と言われたようだ.

高：P13表1を見るとほとんどがノンフィクションだが，ご覧になられたことはあるか？

張：ない．これらは当時の映画誌から得たものである.

高：このようなノンフィクション作品は，現在我々研究者にとってどのくらいの資料価値があるのか？

張：新民映画協会の依嘱映画の場合，映画館で上映されるものではない．たとえば建設総署が出資した依嘱映画は関係者，主に日本人職員を対象として慰安の意味で日本映画と共に上映する．新民映画協会の活動宣伝のために作った映画であるため，上映する映画館が無い．日本映画館で中国の映画は上映せず，中国映画館では新民映画協会のニュース映画を上映することはあまりなく，映画は物語の映画のみであった．もちろんイベント等で無料上映するようなことはあった．その価値については，私自身映画制作という観点から指摘しているが，角度を変えて，新民映画協会の宣伝活動からその映画の宣伝価値がどこにあるのか検討することも重要と考える.
今の視点から，主に宣伝と美化を目的として制作された「文化映画」なので，その信憑性，即ち占領下の現状をどこまで如実に伝えているかをよく吟味しなければいけないだろう．例えば『模範県之建設』はどうすれば良い故郷になるのかという農村合作社推進運動を宣伝する作品である．この内容から判断すると満映も同様の内容を制作している映画ならば現在も見られます．文献資料のみからみた場合なので言いきってしまうとちょっと問題がありますが，中国版のものが，それと非常に似ています．当時の農村合作社運動，特にその宣伝活動を検討する場合，そのような作品は記録映像資料として非常に重要であるが，映画に登場する，満面に微笑みを浮かべて，綺麗な服を着る農民たちは，非常に違和感を

感じさせる.

馬場：アメリカ映画の配給網について伺いたい．というのも昨年，愛知大学の二代目学長で東亜同文書院最後の学長であった本間喜一学長を主役にした「本間喜一物語」を劇化し上演されたのだが，劇中，本間先生の娘さんが「『風と共にさりぬ』を見て大変感激した」というくだりがある．作品は 1939 年制作で，東亜同文書院は上海にあり，アジア太平洋戦争前でまだ租界は接収されていないため，アメリカ映画の上映も可能であったと考えるが，北の方ではどうだったのか．この時期，アメリカ映画の配給網あったのか？当時の日本にとってアメリカ映画のイデオロギーは具合が悪かったのではないのだろうか.

張：現在の映画史研究は上海を中心としており，華北での状況については不確かな所がある．実際，太平洋戦争前は天津と上海はほぼ同じで，ハリウッド映画の配給会社のユニバーサル，二十世紀フォックス，パラマウントなどの八つの代表会社の支社があって，天津，北京，済南，青島など華北での配給を行っていた．新民映画協会設立後，日本映画館が旧中国映画館を吸収し満映の配給によって，欧米映画の配給会社と対抗をしようとしていた．P16 表 2 の中にある，アメリカ映画館では太平洋戦争まで，ほぼアメリカ映画を上映していたが，日本に接収された国泰電影院や光陸電影院では配給組織が変わり，アメリカ映画のみならずドイツ・フランス映画を上映させ，新民映画協会下の洋画館に変わった.「風と共にさりぬ」は華北でも同様に上映された．調査資料をみると，日本からの映画視察団が華北の北京，天津へ行くと，過半数はまず見るのはアメリカ映画だった．当時の日本では外国，欧米映画の上映は禁止という動きがある中，そうした見られない映画は華北，北京に天津で見られた．視察団の中には帰国後，なぜそうする必要があるのか問題視する人もいた.

報告２：三好　章（愛知大学）
「支那派遣軍」の復員について

【質疑応答】（司会：馬場毅）
馬場：今井武夫の履歴から始まり，彼の日記を基に復員の問題についてどうかかわっていたのか，具体的にお話頂いた．

森：P2 書かれている「美山要三」は「要蔵」と書く．ちなみにこの人がどのような人物かというと，長らく日本陸軍参謀本部で編成動員課長を務めた．それは徴兵され連隊へやってきた兵隊たちを訓練して各部隊に配属し戦地へ送り込む部局であり，軍の縁の下の力持ち，きわめて実務的性格の強いポストであった．兵隊をどのように戦地に送り込まれていくのか，その中枢の実務部門で責任をもって仕事をしていた人物であった．終戦直前，陸軍省の高級副官になり，阿南陸相の切腹まで勤め上げた．そして第一復員省ができた時，その中心的人物として復員業務に携わり，最終的には厚生省復員局次長を務めた．復員の実務をやると同時に，BC 級戦犯の合祀問題，千鳥ヶ淵の戦没者墓苑の創設で中心的な役割を果たした．復員業務を日本国内で，中枢で担当した人物であり，美山要蔵の行為は徹底的な人道性をもっていた．ちなみに 1945 年 3 月参謀本部が外地部隊全体に対して，各部隊の現況を取り寄せており，これには正本と副本とがあった．終戦の際に焼却命令が出されただが，管理していた職員の機転により副本のみ焼却し正本は残った．これによって外地の日本軍の全体像がわかった．この資料が復員業務で相当活用されたようだ．

P11 に酒井中将が共産党八路軍と内通したという話が回想録にあるが，酒井隆のグループの中で八路軍の地域に，日本人の協力者を送り込もうとしていた人物の回想録がある．つ都築武年雄という，善隣協会の興亜義塾を出た人物だが，彼の回想録をみると酒井隆のグループが八路軍とどのようなことをしていたのかが具体的に分かる．

馬場：今井武夫が終戦期に中国になぜのこったのだろうか？

私は山東のことを研究しているが，山東の国民党省政府は 1943 年に安徽省に行き山東には無くなり，そこに残ったのは日本軍と中国傀儡軍の汪精衛側と八路軍であった．蒋介石の部隊は山東にはほとんど残っておらず，それが北上してくる時間が必要となる．すると日本軍が治安維持する必要があり，かつ，八路軍側が日本軍の武器を渡せというがそれを拒否したため，11 月の段階で八路軍と山東にいる日本軍で戦闘が起こり，戦死者もでた．それについて部隊史では上官の命令に従ったとういうことで，上官に対する恨み辛みを述べている．これらについては多面的な評価が必要だろうが，蒋介石は共産党との地盤争いにおいて，特に，北の方は日本軍に武装解除させず駐在させて利用したという側面は否定できないのではないかと考える．もっとも山東のみを見た場合であり，中国全体の配置の

中で考えていかなければならないが.

三好：昭和 21 年 6 月末日までは送りだしの責任があるため居る．その後も南京以外にもまだ日本人が残っているため，連絡ステーションとして南京の総軍以外はあり得ないため，岡村寧次自身は戦犯覚悟で残ったが，それ以外の人々も実務処理として南京に十数人残らなければならなかった．武漢に 100 人憲兵がいて病気で苦しんでいる．さらには徐州にもいる．さらに戦犯裁判があるが，各地で開かれている．戦犯栽培の情報を収集しないわけにもいかず，連絡ステーションの設置は必須であり，そのため南京の総軍がのこった．国民党としてもいつまでも残られては困るため追い返そうとするものの，その準備が付かず昭和 21 年 11 月終わりまで残ることとなった．本来彼らも日本軍の兵隊が全て帰る，昭和 21 年 6 月末から 7 月には帰るつもりであったが，結果的に伸びてしまった．さらに問題は昭和 21 年 9 月ころ，岡村総司令官の結核が再発し，隔離された．いくらなんでも隔離された総司令官を置いていくわけにはいかないため，だれかが残らざるを得なかった．翌年，岡村氏は全治するが，そのために残ったメンバーも数人おり，今井氏が帰国した後にも残った人々，小笠原少佐などがいた．

馬場：南京の総軍の一員として残ったという位置付けだろうか？

三好：そうです．総軍の中の連絡班として残った．
華北に出遅れることが国共内戦敗因の一つとなり，それ以前に，満州を失っていることが最大の軍事的敗因になる．そのためには日本軍の武器装備を確保したいが行けない．というところで，ご指摘頂いたように，国府軍がいないところでは暫時待機して治安を維持し国府群の到着を待てという命令を出すわけで，これが現場でどうなるかと言えば，岡村指令官の主張をそのまま持ってくと，地方雑軍に降伏するなという命令となり，八路軍も地方雑軍扱いとなって，八路軍と戦闘を行うことになった．蟻の兵隊たちは，昭和 20 年 8 月 15 日をもって戦闘行為は終了しているにも関わらずそれを無視して閻錫山と一緒にやってしまったため，軍人恩給の対象とならなかった．蟻の兵隊たちは現地除隊したのに，勝手にやってしまったという扱いになる．しかし山東の場合はどうなのか．正式な命令では降伏するなと，自衛のための戦いとなると，恩給についても調べてみたいと思うが，恩給の対象となるのではあれば，正当な命令，つまり降伏の相手として国府軍を選んだため必然的な摩擦，と理解できる．

蒋介石の主張というのはジョンソンが「think うんぬん」という言い方をしているが，それと同じような意味で，日本軍という巨大な武力が無くなり，その武装した少なくとも精鋭部隊は取り合いになる．米軍のマーシャル将軍がマッカーサーと会見した際，日本軍を奪い合うことになると大変だという進言を 1945 年の秋に行っており，米軍の意向はかなり強く働いていると考えてよい．蒋介石の当初の意図として，下心無くそのようなことを言

うことはないと考えると，当然，自分たちの方へ引っ張ってこようとしたということはあると思う．

張（名城大学）：今井武夫の日記は軍人として書いているが，上司のチェックをうけるのではないだろうか？

三好：いえ，これは完全に個人の日記である．

張：この日記の信憑性についてどのように判断するのか，また，資料の価値としてどのように判断するのか？

三好：彼のやってきたことは，満州事変のあとは「支那」範囲としての中国調査．これは報告書があり，それと付き合わせれば通ったルート，だれと会ったのか，ちゃんと書いているかどうかは分かる．盧溝橋事件の際の日誌があるがこれは二重になっており，一つは市ヶ谷に提出している．一次的に和平工作の交渉となり事件後提出している．そのプロセスに関してはきちんと書いてあるものと副官が複製したものと両方をある．これは報告書だが，彼自身の日記と重なっており，付き合わせれば軍の中での信憑性だが間違いなく確認はできる．また，和平工作に関しては，たびたび汪兆銘 引き出し工作をやっている最中も，宋小良工作もそうだが，必要に応じて東京に帰って報告をしている．これは記録が残っているため，その意味での信憑性は極めて高いと言える．だれと会ったのかということについては，あくまでもこれは個人の日記であり，隠す必要がない．それこそプライベートな内容，お嬢さんが女学校を落第してしまうかもしれない，これはお父さんにとっては大変な話である．また出張の時に，東京駅でお酒と焼き鳥をもらい，さあ寝ようというときにお酒をひっくりかえしてしまい，ベッドが酒浸しになってしまった，といった失敗談も出てくる．こういったことを考えると信用していいのではないだろうか．信用というのはもちろん，彼が体験し，彼の目を通してみた上での信憑性であって，彼が性格に事実を把握しているかどうかは別問題である．ただ，いつ誰にあったのかということについてはまず間違いないと考える．

水野：今回は送り出し側からの復員兵の問題を報告されたが，日本の復員省側の連絡はどのようになっていたのか．というのも復員を受け入れる側の組織がコロコロと変わっていたので，どのように連絡をとっていたのか．受け入れる側の用意がないのに一方的に送り出すのは無理なので，何らかの連絡をしていたと思うのだが，このあたりはどうなっていたのか．

当時，「支那派遣軍」の軍人は 120 万人とあるが，この膨大な数の軍人が復員後日本で何をしていたのか．たとえば高官であれば受け入れる所もあっただろうし，防衛省等で活躍

できる高級参謀は居ただろうが，120 万人分の雇用が確保できたとは考えにくく，またお金も 500 円もらったところですぐに無くなってしまう. そういうところから, 復員軍人の人々が日本でその後どうされたのか伺いたい.

三好：復員省側との連絡についてだが，日本と往復している人がいるようだが，どうもこれははっきりしていない．昭和 20 年 8 月 20 日すぎ 23，24 日当たりから日本人による飛行が禁止されるようになり，それまでは上海－長崎間を飛行機で往来していたのができなくなる．そうなると先に帰る人に手紙を託し，アメリカの船で返事を運んでもらって，やり取りをするようになる．中には悲しい知らせもあり，帰ろうと思ったら母親が亡くなっていたことを復員直前に知らされる兵隊さんもたくさんいた．広島の状況もすごかったとしかわからず，帰りがけ列車で通ったときに現場をみて驚くなど，本土の状況はほとんどわかっていない状態であったと考える.

120 万人もの雇用を 8 月からできるわけもない. ただ，下士官クラスまでは警察予備隊や防衛庁等への仕事の話はあったようだ．実は父親が満州で憲兵をやっていたのだが，復員後，防衛庁，自衛隊への入隊の話が来たが年齢も高いことから結局断った．下士官クラスでは仕事の話があったが断った人も結構居たようである. 500 円は将校クラスで一般の兵はもっと安いはずだが，今井氏も 500 円を貰い列車に乗る前にソバを食べて無くなってしまったようだ．戦前なら 500 円あれば家が建てられた，そうした感覚でタイムスリップしている為，悲惨だったと思われる．そうした人々が広島等で規制の秩序が崩壊した中で，大きな河岸を組織する側の用心棒となり，山口組が延びていくということが当然あったと思われる.

柴田：今井武夫と言う人は軍人というよりも官僚畑の人だなと感じる．日記をみると全て他人事のようで，自分が当事者であることが分かっていないようだ．たとえばのどかに俳句を詠んだり，南京虐殺事件についても既述はわずかである．自分たちが捕虜を大量に殺害しておきながら，自分たちが捕虜になると非常に優遇されて，それに対しての感想もなく当たり前のような感じがする．また，陸大の OB ということで中国の軍人から招待されても当たり前のような感覚のようで．この人自身は何者で，何をやったのか自覚しておらず，官僚肌でその場その場の状況に合わせて職務を遂行しているだけのように思う．歴史資料としては面白いが，この人は評価に値する人物なのだろうか．福島原発の事故を起こした東大出の官僚とメンタル的に大差ないように思われる.

三好：評価は分かれる所かと思います．軍そのものは官僚組織なので，その意味では非常に能吏であろう．お嬢さんや息子さんの話からすると南京事件に関して中国で何をやったのか書きたくなかったようだ．これは自分の記録なので何でも書くわけではなく，落ちてしまう部分もある．それに彼は 1937 年 12 月の南京事件発生時には東京におり，立ち会っ

ていない．おっしゃる通り軍を批判する上で重要な視点ではあるが，そうした組織の仕組みを受け入れて，その仕組みの中で動くように育てられてきたのも事実である．立派な人だから研究するという気は全くない．かれは家庭人としては良い父親であり，私は好感をもっている．また官僚としても有能であろう．しかし軍人としてどうなのかというと，和平工作の事を今回触れていないので問題かもしれないが，汪兆銘を引っ張り出すにあたって嘘は付いていない．しかし結果的に後ろから足を引っ張られて，はしごをはずされてしまった．その意味で戦争をしてはいけないと言う点では正しく理解していたと考える．

柴田：わたしは石原莞爾の方がよっぽど立派であると考える．彼は東京裁判で自分が裁かれないのを知り「自分が満州事変を起こしたから，俺を裁け」と言っている．つまり彼はそういう自覚があると言える．しかし今井武夫の場合，他人事のように感じる．

三好：戦犯になるだろうと覚悟はしている．

柴田：自分が裁かれるべき，とかは書いていないのか？

三好：石原莞爾は東京裁培に出ることで自分がしてきたことを正当化したかった．彼は「自分を被告席に据えろ」とか「被告を裁けるのかお前ら」とやりたかったが，今井武夫はそうした論理は持っていなかった．つまり彼としては戦争を避けたかった．中国本体と戦争するのは最低であると考えていた．

松田：「支那派遣軍」は地域構成で北支，中支，南支，香港派遣軍とわかれているが香港はイギリス軍に降伏したのではないだろうか？

三好：軍事的にはそうだろうが，降伏調印式には関しては南京で行った．

松田：私の父は香港で捕虜になり，そこから佐世保へ着き，広島の焼け野原を見て戻ってきたと聞かされた．さきほど 120 万人の旧軍人の雇用について質問されていたが，私の知るところでは農民は農民，教員は教員といったように旧職場に復帰できる者はした．

三好：古い規定によると兵役中は在職年限に含めず，元の職場に復帰し，給料も元の状態でスライドして出てくる．これは一般企業の場合だが，公務員も同様であったと考えられる．それでも大変だったであろう．

森：「支那派遣軍」の主要な将軍たちの戦犯容疑の問題についてだが，国民政府は無条件で戦犯容疑を外したのではなく，一応，戦犯として扱っている．最後の戦犯であった岡村寧

次については 1948 年 11 月，国民政府の中で戦犯としてどう裁くべきかという重要な会議を開いている．その中で死刑・無期懲役・無罪の 3 通りの意見がでた．無罪にすべきであるという理由を述べたのが中国軍の曹士澂将軍であった．その一番の理由としてあげているのは，反共の考えが非常にしっかりしており，終戦直後における共産党軍に対する立場がしっかりしたものであったということ．また，戦後の国際情勢の推移の中で岡村を帰せば反共活動に有利であるという理由を上げている．その意見が蒋介石の元に提出され，結果として岡村は無罪となり 1949 年 1 月，日本に送還された．手続き上の問題はあるが，蒋介石の「支那派遣軍」の将軍たちに対する気持ちは，蒋介石が士官学校で士官の卵として訓練を受けていた時の教官たちが将軍としているわけで，彼の意識として「支那派遣軍」の中枢部については先生という意識があった．日本と戦争をしたから日本人を憎むという気持ちは無いようである．もちろん反共に日本軍を利用したという側面はあるものの，そもそも根本のところで反日意識というのはない．彼自身，新潟県の新発田連隊で訓練を受け，日本人や日本社会をよく知っており，戦争を引き起こした者と一般の日本人は違うということをよくわきまえていたのではないかと考える．

三好：1944 年の始め戦争がしんどい時，蒋介石は日本軍を例に，国民党軍に対してもっとしっかりしろとはっぱをかけている．

森：蒋介石は戦略家としては傑出しているが，戦術的に国民党軍が弱いということは熟知している．戦争終了後も日本の軍人をリクルートしたいと言っている．

・WS 開催について

本年度，来年の 2 月に 1 日程度でワークショップを開催したいと思います．研究会メンバーが報告，コメント，司会をしたい．もし金銭的に余裕があれば中台から招聘したい．

・出版計画について

これまでの報告を本にまとめて出版を計画している．今回で研究会は 14 回目で，のべ 28 名の方に御発表頂いた．すでに外部で発表されている方も居られるかもしれないが，その場合，日中戦争に関することで御寄稿頂ければと思う．

出版に際して外部資金が必要となるが，現在無いため，資金の獲得を考えなければならない．いま考えられるのは科研の出版助成，NIHU，トヨタ財団への応募，東方書店への持ち込み等考えられる．今回は高橋所長もご出席いただいているので，NIHU への働きかけをお願いしたい．そうなった場合，NIHU のテーマは現代の政治・経済に関連しているため，日中戦争となると何かしらの媒介項が必要となるだろう．

報告者を優先するが，テーマに関連するもので未発表のものであれば受け付ける．テーマは原則として 1931~45 年までであるが，あくまでも原則としてである．出版社にしろ，外部資金を得るにしろ，ある程度たたき台が必要となるため，できれば 6 月 15 日までに仮で構わないので執筆テーマ，寄稿の諾否を頂きたい．枚数は最大 400 字詰めで 50 枚．実際の原稿は来年 2014 年 1 月末を締め切りにしたい．執筆したいという方がいらっしゃったらお受けするが，すぐには出版されるかは微妙である．来年締め切りであっても，来年度中に出版できるか，再来年の可能性もある．

・次回研究会について

次回，研究会の日時は 7 月 20 日．報告者は安都根氏，曹大臣氏にお願いする．